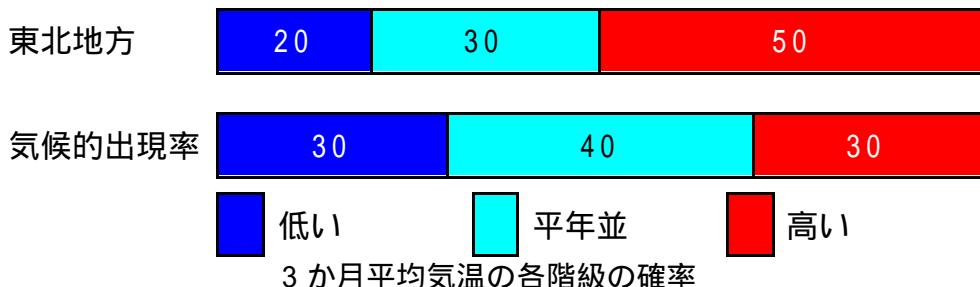


東北地方 3 か月予報 (1 ~ 3 月) の解説

平成 11 年 12 月 20 日 仙台管区気象台

1. 予想される天候

(1) 3 か月平均気温の予想される各階級の確率 (%)



[概要]

1~3月の3か月平均気温は、「高い」の可能性が最も大きく、その確率は50%です。「平年並」の可能性が次に大きく、その確率は30%です。「低い」の可能性は小さく、その確率は20%です。

(2) 可能性の大きな天候の特徴

	1月	2月	3月
気圧配置	冬型の気圧配置となるが長続きしない。	時々冬型の気圧配置となる。寒暖の変動が大きい。	低気圧と高気圧が交互に通る。
天 気	東北日本海側では平年に比べ曇りや雪または雨の日が多く、東北太平洋側では平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	平年と同様に、東北日本海側では曇りや雪の日が多く、東北太平洋側では晴れの日が多いでしょう。	天気は数日の周期で変わり、平年に比べ東北日本海側では曇りや雪または雨の日が多く、東北太平洋側では晴れの日がないでしょう。
気 温	高い	平年並	高い
降 水 量	平年並	平年並	平年並

なお、1~3月の3か月間の降水量は「平年並」の可能性が大きいでしょう。東北日本海側の降雪量も「平年並」の可能性が大きいでしょう。

<参考資料>

平年のおよその天気出現割合 (%)

	1月		2月		3月	
	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側
晴れの日	21	68	31	69	49	68
雨の日	66	23	60	26	46	27

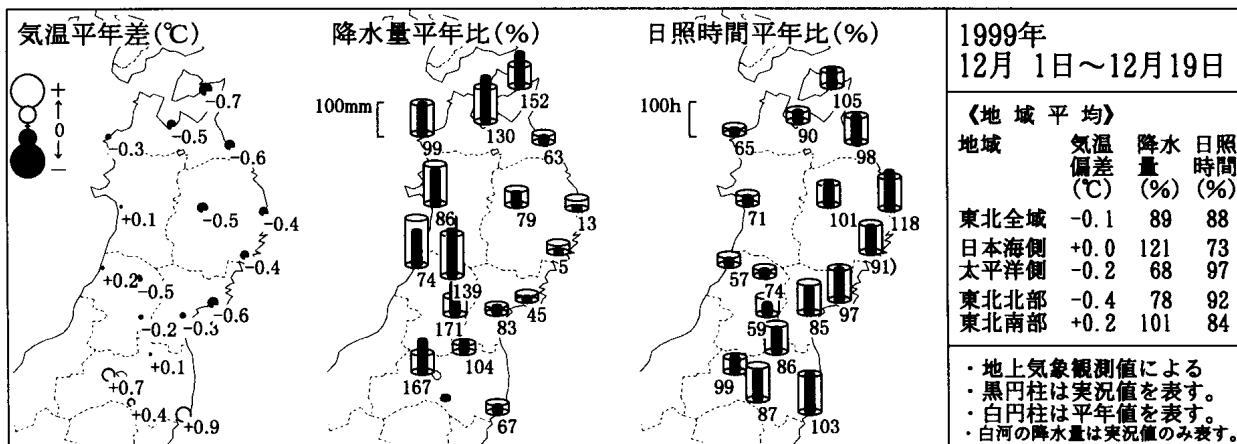
注：季節予報では、「日照率 40% 以上の日数」、「日降水量 1mm 以上の日数」を晴れの日、雨の日の目安として用いている。この 2 つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。日照率は、1 日の日照時間を可照時間（太陽の中心が東の地平線に現れてから西の地平線に没するまでの時間）で割った値である。

2. 前回 (11月 22 日) 発表の 3 か月予報からの変更点

なし。

3. 最近の天候経過と循環場の特徴

(1) 最近の天候経過



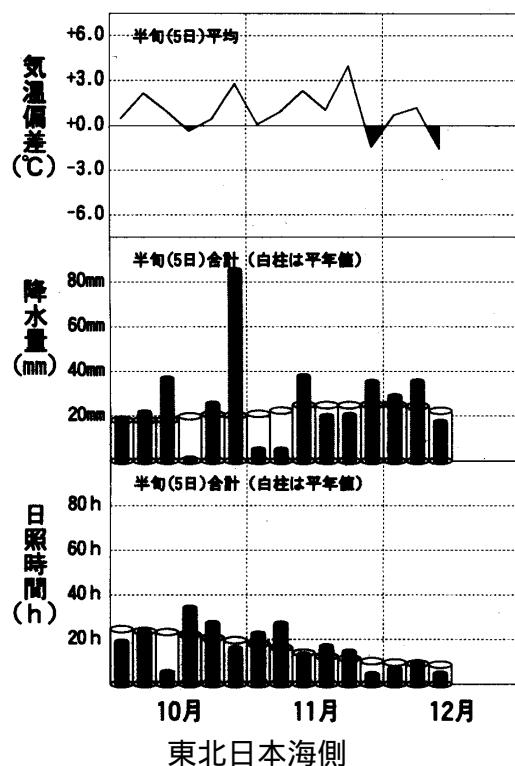
東北地方における12月の平均気温、降水量、日照時間

12月(19日まで): 上旬は、短い周期で気圧の谷が通過し、通過後は一時冬型の気圧配置となった。このため、東北日本海側では雨や雪の日が多く、9日は寒冷前線の通過で雷雨となった。東北太平洋側では、気圧の谷の影響を受け曇りや雨または雪となる日もあったが、概ね晴れた。

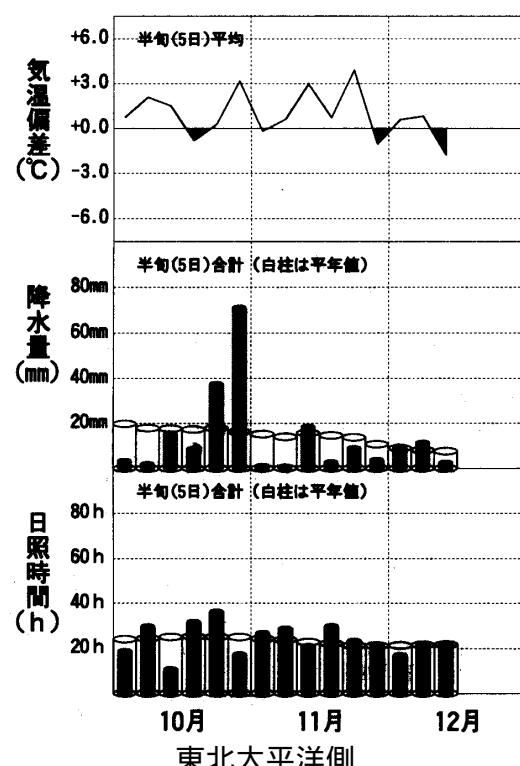
中旬は、冬型の気圧配置が続き、東北日本海側では雪や雨の日が続いたが、東北太平洋側では概ね晴れた。

この期間の平均気温は、11月下旬から東北北部を中心にしばしば寒気の影響を受けるようになつたため、東北北部で平年を0.4下回り、東北南部では平年を0.2上回った。降水量は、東北日本海側で平年比121%と平年を上回ったが、東北太平洋側では平年比68%と平年を下回った。日照時間は、東北日本海側で平年比73%、東北太平洋側で平年比97%と平年を下回った。

半旬経過図



東北日本海側



東北太平洋側

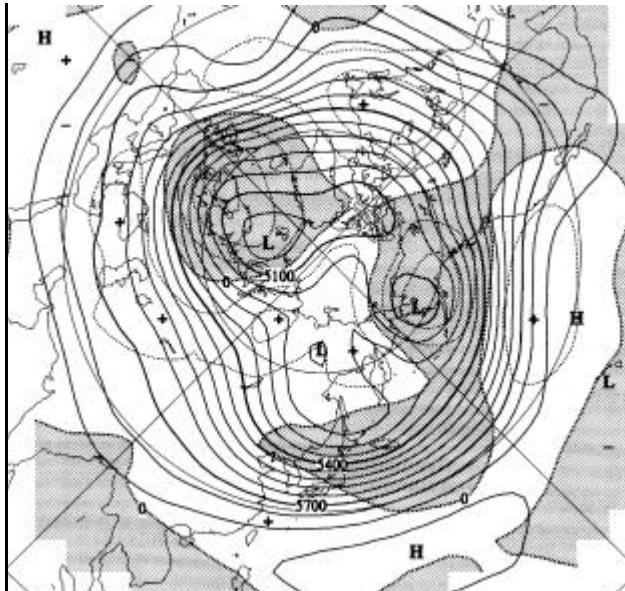
(2) 中・高緯度の循環

12月：極付近は正偏差で寒気の放出場となった。このため、沿海州から北日本、その東海上が負偏差域となり、東経90°付近が正偏差域となって北日本に寒気が流れ込みやすい場となった。

日本付近を見ると、基本的には東西流（ゾーナル）場となっており、等値線の間隔が混んでいる。これは、短い周期で気圧の谷が通過したことに対応する。

上旬（図略）は、北海道から東海上が負偏差となっており、短い周期で気圧の谷が通過し、通過後は一時的に冬型の気圧配置となったが長続きしなかった。

中旬（図略）は、負偏差の中心が北日本から東海上にかけて広がり、冬型の気圧配置が持続した。



12月1～19日平均 500hPa 天気図

等値線間隔 60m

陰影部は平年より高度が低い領域

(3) 熱帯太平洋の状況

エルニーニョ監視海域（北緯4度～南緯4度、西経150度～西経90度）の11月の海面水温偏差は、-1.4であった。11月の太平洋赤道域の海面水温は、東経150度以東で平年より低く、西経175度から西経90度にかけて-1以下の負偏差が見られた。一方、東経130度から東経145度にかけては+0.5以上の正偏差が見られた。

11月の南方振動指数は+1.1であった。

（南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正（負）の値は貿易風が強（弱）いことを示す。）

エルニーニョ監視指標

エルニーニョ 監視海域	1998年		1999年										
	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
月平均海面水温()	23.8	24.2	25.5	26.8	26.7	26.4	25.5	24.8	24.0	23.8	23.6	23.2	
平年偏差()	-1.1	-1.2	-0.7	-0.1	-0.4	-0.2	-0.6	-0.4	-0.6	-0.8	-1.0	-1.4	
5か月移動平均()	-0.8	-0.7	-0.7	-0.5	-0.4	-0.3	-0.5	-0.5	-0.7	-0.8			
南方振動指数	+1.5	+1.5	+0.8	+0.8	+1.8	+0.3	+0.1	+0.6	+0.0	-0.1	+1.1	+1.1	

注：海面水温の平年値は、1961～1990年の30年平均値である。

(4) エルニーニョ現象等の今後の見通し（1999年12月～2000年6月）

エルニーニョ監視海域の海面水温はこの冬の期間、平年より低く、その後次第に平年並に近づくと予測される。現在のラニーニャ現象は少なくとも今冬いっぱい続くと予測される。

【解説】

監視海域の海面水温偏差は今秋以降負の値が次第に強まり、南方振動指数も10月から+1以上と貿易風の強い状態が続いて、大気・海洋ともにラニーニャ現象の特徴が明瞭になってきた。

エルニーニョ予測モデルによると、監視海域の海面水温は、今後負偏差の値が次第に小さくなり、来春には平年並、それ以降は平年よりやや高くなる予測結果を示している。しかし、予測モデルは海面水温を比較的早く平年並に戻そうとする傾向が最近見られる。また、冬季においては監視海域の海面水温偏差の持続性が高いという統計的な事実があること、今後海面水温偏差を上昇させる要因と考えられる西部太平洋赤道域表層の暖水に顕著な変化が見られないことなどから判断して、監視海域の海面水温が平年より低い状態は少なくとも今冬いっぱい続くものと予測される。